

中嶋嶺雄

ドイツと日本が勝つ という悪夢



1936(昭和11)年、長野県生まれ。東京外大卒。現在、東京外大教授(国際関係論、現代中国論)。主要な著書に「北京烈烈」「中ソ対立と現代」「現代中国論」「中国の悲劇」がある。

一九八九年は、まさに歴史の転換期であったが、東欧諸国の今日の変動は、ある意味で、中国・天安門事件の悲劇を代償にして実現したのだと言ってもよいだろう。ソ連は、その中国と東欧の中間にあって苦悩し、動揺している。だが、やがてはソ連も、そしていずれは中国も「東欧化」してゆかざるを得ないのではないか。

私は昨年後半のこの転換期に東欧(チェコと東ドイツ)、ソ連、中国を相次いで訪れる機会があったが、これらの社会主義諸国は、社会主義そのものによって痛めつけられ、苦しめられている現実を改めて確認した。しかも、これら諸国は、共産党一党独裁下に国民を束縛して自由を奪ってきたばかりか、社会

主義としての何か魅力的な果実らしいものをほとんど産み出していない。首都の建造物をとってみても、人びとの人気を集めているのは、彼らが打倒の対象とした帝政・王政時代のものばかりである。東ベルリンの名所ベルガモン博物館の壮麗な遺跡にしてもドイツ帝国が小アジアやメソポタミア一帯から収奪したものであるし、ブラハの王城、モスクワの

クレムリン宮殿、北京の紫禁城(故宮博物院)といずれも帝政・王政の遺産だ。しかも、民衆の主人公であるべき社会主義国家の指導者は、今度は「赤い貴族」として、それらの遺産をことごとく自らの住居もしくは拠点にして君臨するのだから、これでは民衆に見放されるのは当然であろう。

一方、社会主義ではどこも経済がうまくいかないのに、都市の再開発にまで手がまわらず、モスクワにせよ、北京にせよ、あるいはブラハにせよ、歴史に名だたる旧都はいずれも命脈が尽きて廃墟寸前になりつつある。試しにクレムリンに對面するグム百貨店の裏通り一帯、北京王府井に交錯しているいくつかの胡同、ブラハの旧市街(スタレー・ミェスト)の小路あたりを歩いてみればこのことは歴然とするのであって、都市がいかに息絶え

絶えに喘いでいることか。しかも、社会主義国では自国通貨に交換性がなく、従って価値がないために、米ドルや日本円などのハードカレンシーがこれら諸国で圧倒的な力を発揮している。人民元はいままでもないが、ルーブルであっても、物不足のソ連では無用化しつつあり、外国人がタクシーに乗ることもできない。私自身、去る十一月下旬にレーニングラードからモスクワの国内空港に着いたとき、たまたまそのことを聞いていて持ち合わせたマルボロのタバコ二箱のお蔭でホテルまでタクシーに乗ることができたのであり、いまやルーブルに代わる「通貨」になっていると言っただけのマルボロのタバコがなかったら、凍てつく雪の中で大いに困窮したはずである。

こうして二十世紀も少なくとも一九六〇年代半ば頃までは、歴史の進歩の道標とみなされてきた社会主義は、いまやその内部がすっかり腐蝕してしまった。このような現実を直視すれば、社会主義そのものが人間の「疎外」をもたらず元凶となり、まさに現代の巨悪と化したことを歴史の教訓として率直に認めなければならぬ。

だが、わが国の一部には、「社会主義もダメだが資本主義にも問題がある」と言った喧

嘩両成敗のような見方や「社会主義にもよいところがある」といった未練がましい口吻が依然として存在する。私自身は、かつてベトナム戦争十周年に際して発言を求められたとき、「こうして十九世紀の思想としてのマルクス主義は、二十世紀末から二十一世紀にかけて、ヨーロッパからロシアへそして中国へ東南アジアへといまひとつの転回をするのかもしれない。今度はマルクス主義からの離脱、すなわち『脱社会主義』という逆転したかたちをとって」(拙稿『解放』神話が残した負の遺産——アジアにM・L革命はもう起きない)、『朝日ジャーナル』一九八五年五月三日号)と述べて以来、いまや社会主義国では左から右への逆回転こそが歴史の進歩であることをしばしば強調してきたつもりである。

このような方向が真実となった今日、社会主義にもはや未来はなく、マルクス・レーニン主義はほぼ完全に命脈が尽きたといえようが、では次の歴史の変化は何なのだろうか。例えば、二十世紀は戦争と革命の世紀であった。そして二度にわたる世界戦争とマルクス・レーニン主義の革命によって世紀の覇者になったのが米ソ両超大国であったが、いまやこの両国に昔日のような力はなくなりつつある。過般のマルタ会談に見られたように、

米ソ冷戦が終焉せざるを得ない歴史的背景がここにあると言えよう。しかし、戦後の世界秩序を規定したヤルタ体制は、まだ残っている。いや、米ソ双方ともに、なんとしてでもヤルタ体制を死守しようということでは完全に一致していると思わなければならない。ヤルタ体制の枠組が消えて「ヤルタ以前」にまで戻るようなことになれば、そこにくっきりと浮き彫りされるのは統一ドイツと日本の大きな影であり、結局、二十世紀の歴史をやり直さなければならなくなるからである。

にもかかわらず、第二次大戦の敗者であったはずのドイツと日本が結局勝ってしまうのではないかという悪夢が、今日から二十一世紀にかけての世界の動向を深部で規定するのではなからうか。ポール・ケネディやヘンリー・キッシンジャーのような文明論者や戦略家は、中国を二十一世紀の覇者に考えているようだが、それは幻想にすぎないだろう。

それにしても私個人は、ドイツ語も話せないのに、ドイツを旅行しているときがもつとも違和感が少ない。多くの日本人もおそらくそうなのではあるまいか。そのような日本とドイツとの共通項ないしは紐帯に、アメリカもソ連も中国もあるいはフランスやイギリスもこれから奇立つようになるかもしれない。